

言葉に叱られて

悩んだ時は本屋に行くことにしている。古今東西、数えきれないほどの人の言葉が集まる場所。励まされたり、気づかされたり。まるでカウンセリングを受けるかのように、私は黙々とページをめくる。

その日、手に取ったのは茨木のり子の詩集だった。「友人」という詩の一節。

「なくて もともと

一人か二人いたらば 秀」

ここ最近、何かにつけて集団で群れている写真をネットに投稿する若者が増えてきている。私は彼らに対し、常に斜に構えた見方をしていた。自分がいかに多くの人間とつながっているかを示すなんて、「友だち百人できるかな」と本気で考えている子どもと同じではないかと。だが、一方でそれをくだらないと一蹴することはできなかつた。世捨て人ではないので、やはり友人はいないよりいた方がよい。

自分に欠けている『社交性』をまざまざと見せつけられているようで、私の心はささくれ立っていた。

そんな折に茨木さんの言葉である。友人は数ではない。「なくてもともと」であり、たまに話が合つて笑い合えたらラッキー程度で良いのであると。スケジュール帳を誰かと会う約束で埋め尽くす必要なんてない。自分が居心地良く思える相手と時々話せればそれで十分なのだ。

「老若男女おしなべて女学生なみの友情で

へんな幻影にとりつかれている」

私が苦しんでいたのは、「へんな幻影」だったのか。半世紀以上前を生きた著者にびしやりと頬を張られた気がした。しっかりしなさい、周りに流されてはいけないのよ。

本を開けば、答えが見つかる。先人たちがこの世に残してくれた言葉を胸に、私は今日も生きる。